



2020年に向けて

秋池 玲子

ボストンコンサルティンググループ
シニア・パートナー&マネージング・ディレクター

2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催が決まったことが、想定されていた他にも思いがけない効果を生み出しているように感じる。

一つには、企業経営を加速する効果があったこと。今までやろうと思いつながら決めかねていたことが、招致に成功した途端に動き出したようだ。2020年に中堅になる社員を中心に新規プロジェクトを開始した企業もあるし、長い間議論されながらも決めきれなかったことをいよいよ意思決定した企業もある。さまざまな方のお話を伺っていると、何かが動き出した実感を覚える。たとえ東京に拠点のない組織だとしても、同業他社に刺激を受けることもあるのではないかな。

組織にとっても個人にとっても、一里塚ができるのは、「やってみよう」という気持ちになるために大切なことだ。日常は、緊急性が重要性を駆逐する時間の流れである。どんなに優れた経営者にとっても、何らかのきっかけがあることは、自らの周辺を見直し、保留となっていたことに手を付ける有効な機会だ。オリンピック・パラリンピックは、多くの人にとって「与えられた」機会であるが、自らの意志で一里塚を作るのも、古典的ながら経営の一手法として有効であることを再認識している。

もう一つには、「失われた20年」と呼ばれる時期に社会人となった若い世代に、自分たちの業務がまっすぐ前向きなことにつながる経験を味わってもらえること。もしも社会人になってから成功体験がないという気持ちになっている20代、30代がいるのであれば、たとえ直接オリンピック・パラリンピックにかかわる仕事をしていなかったとしても、ぜひ2020年に向けた活気を味わってほしいものだと思う。

名称は「東京」オリンピック・パラリンピックであったとしても、これを日本全体のものとして捉え、同時に、東北の復興にも常に皆が心を寄せて、東北の方々の活力の源にもなるよう、2020年に向かいたいと思う。自らの持ち場で何ができるのかを考える日々である。